

### 化協研究報告会で来日

## 欧米化学工業団体LRI担当者に聞く

日本化学工業協会が都内で先週開催した第7回LRI（ロングレンジ・リサーチ・イニシアティブ）長期自主研究）研究報告会は、大学や研究機関の専門家、企業の関係者ら200名近い聴衆を集めることにも、今回初めて欧米業界団体のLRI担当者が講演者として参加し、取り組を紹介した。国際化学工業協会協議会（ICCA）のシャネット・モスト、LRIプログラミンクグループ議長、米国化学工業協会（ACC）ティナ・バハドリLRIディレクター、欧州化学工業協会（CEFI）のガレット・クロッツLRIディレクターに、研究の意義や今後の展開、日本の取り組みへの評価などを聞いた。

— LRIプログラムの経緯は。  
バハドリ レスポンシブルケア活動の一環として1998年に始まった。取り組むという方向にある。具体的には、化学物質の組むを重なるに連れてプログラムも成熟し、連携も活発に行われている。互いに学び合う雰囲気が出てきた。そして3極で積み上げてきた。そして3極で積み上げてきた。そして3極で積み上げてきた。

モスト— ウィ 非常にチームワーク良く進められている。各研究者が、うまく分担して、大きなパズルを組み上げていくようなと感じた。

クロッツ— 日本のLRIは非常に広範。継続することを望みたい。とくに基礎的な領域では、単独で紐解くことのできない部分があるだけに、さらに幅広い分野の参加が求められるだろう。

バハドリ— 大学など高レベルの研究者と産業界が一堂になってリサーチを語る場が持たれたことは印象深

### ICCA

J・モスト— ウィ氏



## チームワーク優れる日本

### ACC

T・バハドリ氏



— 科学者にとって難しいのは答を出すためのリンクスをとるかという点。日化協が一大パートナーとなって今後も強固な協力を築いてほしい。

— リスク評価の結果を広く社会に伝えることは重要な課題です。

クロッツ— 欧州ではREACHが動き出し、化学が前面に出ることが求められている。官民が相互補完的に協働して課題にあたっていかなくてはならない。動物福祉の分野では、NGOなどとともに研究の大枠を検討した。一方、産学機関

## 外部関係者との対話増す

— 3極共同の課題としてバイオモニタリングが挙げられています。モスト— ウィ 化学物質が人体組織内に、どれだけあるか検出するもので血液、体液、尿などをモニタ— する。データ収集とともに、その解釈を進めなくてはいけない。05年からは国際的なワークショップを開き、課題抽出にかかってい

での研究結果は、一般の人に理解可能な言葉で話す必要がある。そこでは多数の矛盾するメッセージが届かないような気がする。重要だ。

### CEFI

G・クロッツ氏



## 化学産業に変化を呼んだ

る。今年は6月にアムステルダムで開き、政府含め多くの関係者が集まった。バハドリーは、5～10年前の多様なリスクアセスメントを見るところが自然な流れ。とくに人や環境に影響のある暴露量を、科学的な根拠を持って提示したい。最新の技術を使うことで、社会的な信頼性を得ることができると思う。

— ゲノム解析の結果を利用する動きにありま  
すね。

バハドリー まだ立ち上がって間もないが、米国では非常に勢いづいている。化学物質のリスクアセスメントが、もっと迅速に行えるなどスリットが期待されている。欧州が先行しており、いまOECDのレベルで調整が進んでいる。今後、国際レベルでの協力が必要になる。まだ進め方や目標などコンセプトづくりの段階で、具体化に至っていないが、将来の方向としては確実だ。

コミュニケーションは難しきも。

バハドリー 5～10年前のLRRIは、科学者同士の話だったが、いまは多くの関係者が助けてくれるようになった。政策担当者は何を求めているのか話すようになったし、科学者の言葉のどこが分からないのかを教えてください。政策決定者や一般の人たちに話したい内容を、分かる言葉に「翻訳」することを手伝ってくれる人たちも現れてきた。科学の成果が政策決定に反映され、一般にも伝わるという三位一体のコミュニケーションという新たなLRRIを実現している。クロツツ もう一つのポイントは、LRRIが外部から化学産業の内部に向けて、どういう見方をされているのかを教えてください。それにより外部との真の対話ができるようになった。ある意味で化学産業界に一つの変化を呼んだといえる。

— 政策担当者などの

(聞き手—瀬古浩司)